

研究タイトル:

## 江戸期初期草双紙研究



氏名:	船戸美智子 / FUNATO Michiko	E-mail:	funato%tokyo-ct.ac.jp
職名:	准教授	学位:	
所属学会・協会:	日本近世文学会, 日本児童文学学会, 絵本学会		
キーワード:	草双紙, 桃太郎, 富川房信, 絵巻, 昔話,		
技術相談 提供可能技術:	・江戸時代の印刷物の翻刻		

### 研究内容: 江戸時代における桃太郎話の諸相

日本の代表的な「桃太郎」は、幼児から高齢者にいたるまで人口に膾炙した昔話である。それがいつ頃にできあがったのかについては定かではないが、書物として世に出てくるのは、江戸時代からである。

江戸時代には、昔話として語られていた痕跡が書物や絵巻、浮世絵などに現れている。それを紐解くことによって、一つは桃太郎話の源流をさぐることができると考えている。

またもう一つは、江戸時代の文化の中で、桃太郎が一つのキャラクターとして愛されてきたのはなぜかということだ。草双紙では、富川房信などが画いた子供向きのものから、黄表紙などの大人向きの作品に至るまで桃太郎ものの作品が数多く創作されており、パロディ化されたものも多い。浮世絵にも画題として桃太郎が定着しており、様々な絵師が手がけた作品が残っている。歌舞伎や落語の中にもあり、文学だけでなく、芸能の中にも好まれて作品化されているのである。

また、最近では桃太郎絵巻も、国内外を含め数多く制作されていたことがわかってきた。しかし、草双紙の中の桃太郎とは違う、絵巻という独自の文化の中で享受されていたようである。草双紙が消耗される読み物として庶民の間で消費されていく一方で、絵巻では、格の高い絵師たちが藩主たちの求めに応じて、嫁入り道具や鑑賞に耐える美術品として後世に受け継いでいる。つまり、それらの中に描かれた桃太郎は、必然的に動と静の様相に分かれており、一線を画し、影響関係は見られないようである。

いずれにしても、他の昔話も数多くある中、桃太郎が素材として圧倒的に選ばれているのである。

それらの様々な媒体に表れた桃太郎を分析することにより、今日に至るまで桃太郎が昔話として受け継がれ、今なお日本人らしいキャラクターとして享受され続けている理由を今後も探っていきたい。

また、現代においても、さらに桃太郎の良さを後世に残していくために、微力ながら貢献できればと考えている。

### 提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)	